

〔論 文〕

宝塚ファンにおける轟頁と悲嘆に関する探索的検討

坂 口 幸 弘^{*1}、後 藤 康 恵^{*2}

I. はじめに

宝塚歌劇の公式ホームページによると、宝塚歌劇団は、現阪急電鉄株式会社である箕面有馬電気軌道が設立した宝塚新温泉と呼ばれる遊園地の旅客誘致企画として1914年に初の公演を行った歌劇団である。その特徴は、団員が未婚の女性だけで構成されており、男性役も女性が演じるところが挙げられ、男性役を「男役」・女性の役を「娘役」という。女性のみによる歌劇として存在しているのは、現在では宝塚歌劇団のみである（江藤・植木・加藤・清水・日向，2007）。

宝塚歌劇には唯一の公式な会員組織である「友の会」とは別に、生徒の多くには個々の私設ファンクラブがある。運営しているのは各生徒のファンであり、宝塚歌劇団の公式ファンクラブではない。私設ファンクラブの主な役割としては、①ファンクラブ会員のチケットの取り次ぎ販売、②生徒のガード、③ファンイベントの実施がある。桜木（2002）によると、宝塚歌劇の創設者である小林一三氏は、人気のある生徒も、人気のあまりない生徒も平等に扱い、生徒全員を愛するために、私設ファンクラブを非公認とした。しかし非公認といえども、劇団側もそれを認知している。これは、生徒が舞台に専念するためにはファンクラブの存在は必要不可欠だからである。宝塚歌劇にはマネージャーなどは存在しないが、それに近い役割を仕事ではなく無償で行うのがファンクラブである。つまり劇団にとっては、お金をかけることなく生徒を護ってくれるファンクラブの存在は大切なのである。このような私設ファンクラブ

の会員は生徒への身内意識が強く、他生徒や他組のファンに対して時に戦闘的になることもあるとされる（空野，2013）。もちろん私設ファンクラブに入っていない宝塚ファンも数多く存在する。ファンとは、「日常では出会わないある特定の人物（グループ、チームを含む）に対して好意を持っている自称“ファン”である人」と定義される（川上，2004）。宝塚歌劇自体が好きで観劇している人や、特定の応援したい生徒がいない人など幅広い観客が存在しており、私設ファンクラブにこだわらない人も多い。

特定の生徒を応援するファンは、自分の好きなスターのことを「轟頁」、他者の好きなスターのことを「ご轟頁」と呼ぶ（空野，2013）。轟頁という言葉は、歌舞伎や相撲などで用いられるが、宝塚でもこの言葉がファン用語として使われている。ファンにとって轟頁にしていた生徒、いわゆる「轟頁ジェンヌ」の退団は衝撃的な出来事である。中本（2009）によると、主な退団理由は、結婚、芸能界への転身、他の職業への転身、体調不良などで舞台の継続が困難になった場合などである。退団すると二度と宝塚の舞台に立つことはなく、特に男役は二度とその男役姿を見ることができなくなってしまうため、ファンにはダメージが大きい（はるな，2011）。退団発表の日から涙がとまらない、退団後もふいに悲しくなり涙が出る、再び宝塚を観劇するのに5年かかった、入り待ち・出待ちなど思い出が多すぎて劇場の最寄り駅には近づけないなどの悲嘆や喪失感を感じるファンも少なくない。

宝塚歌劇やそのファンに関する研究は、社会学を中心として法学、経済学・経営学、歴史学・文

キーワード：宝塚歌劇、轟頁、悲嘆

*1 関西学院大学人間福祉学部教授

*2 関西学院大学人間福祉学部卒業生

学、建築学など多岐に渡っているが、宝塚ファンの心理に関する実証的な研究はほとんどなく、特に宝塚歌劇ならではの轟真ジェンヌの退団に伴うファンの悲嘆に関する検討はこれまで行われていない。宝塚歌劇とファンは密接な関係にあり、宝塚ファンの存在によって宝塚歌劇や生徒は成長してきた。宝塚ファンの心理を明らかにすることは、今後の宝塚歌劇のさらなる発展や展開にもつながるのではないかと考えられる。

そこで本研究では、宝塚ファンにおける轟真ジェンヌに対するファン心理の構造を明らかにするとともに、轟真ジェンヌの退団による悲嘆について探索的に検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象と調査方法

宝塚ファン 110 名を対象に、個別自記入形式の質問紙調査を実施した。調査協力は、機縁法により、宝塚ファン同士のネットワークを通じて依頼し、質問紙への回答を求めた。調査時期は、2014 年 9 月 11 日～11 月 8 日であった。回答者 110 名のうち、未回答の項目が複数ある回答者 4 名は分析から除外し、最終的に 106 名からの有効回答を分析対象とした。性別は、男性 3 名 (2.8%) 女性 103 名 (97.2%) であった。年齢は 18 歳～76 歳で、平均 37.4 歳 (SD=16.5) であった。倫理的配慮として調査協力の依頼時に文書にて説明を行い、同意を得られた方のみ回答していただいた。回答は無記名で行われた。

2. 調査内容

1) 基本属性

性別・年齢に加え、宝塚ファン歴、1 年間の観劇回数、宝塚ファンの友だち、通称「ヅカ友だち」の有無、ファンと公言しているかどうかについての回答を求めた。また、これまでに最も応援していた轟真ジェンヌのファンクラブへの入会の有無、楽屋入りする轟真ジェンヌを一目見るために開演前後に楽屋口で待つ「入り待ち・出待ち」の参加経験、轟真ジェンヌとファンとの交流会である「お茶会」の参加経験を尋ねた。加えて、轟真ジェンヌの退団経験の有無について尋ねた。退

団経験がある人には、轟真ジェンヌの退団理由に関して、「満足」「普通」「不満足」の 3 件法で回答を求めた。

2) 轟真ジェンヌに対するファン心理尺度

轟真ジェンヌに対してどのようなファン心理を抱いているのかを明らかにするため、「プロ野球ファンの心理尺度」10 因子 65 項目 (広沢・井上・岩井, 2006) を参考に、「轟真ジェンヌに対するファン心理尺度」を作成した。当該尺度の 65 項目のうち、特に宝塚ファンにも該当する 25 項目のみを抜粋するとともに、宝塚ファン 4 名を対象に予備調査を行い、宝塚ファンに相応しい表現に修正した。各項目について、「全くそう思わない」「どちらかというと思わない」「どちらともいえない」「どちらかというと思う」「とても思う」の 5 件法 (1～5 点) で回答を求めた。

3) 轟真ジェンヌの退団による喪失悲嘆尺度

轟真ジェンヌの退団を経験していたことがある回答者にのみ、どのような喪失体験であったのかについて尋ねた。まず当事者の体験談などに基づき、「轟真ジェンヌの退団による喪失悲嘆尺度」の準備項目として、98 項目を独自に作成した。次に宝塚ファン 4 名を対象に予備調査を行い、誰もが当てはまらなると考えられる項目や類似項目を除外して、最終的に 60 項目を用いた。60 項目それぞれについて「当てはまらない」「やや当てはまらない」「やや当てはまる」「当てはまる」の 4 件法 (1～4 点) で回答を求めた。

III. 結果

1. 宝塚ファンとしての活動

宝塚ファンとしてのファン歴は、半年～60 年で平均 15.1 年 (SD=14.5) であった。年間の観劇回数は、1～50 回で平均 10.4 回 (SD=10.9) であった。ファンクラブへの入会の有無については、入会経験のある人が 29 名 (27.4%)、ない人が 76 名 (71.7%)、無回答が 1 名 (0.9%) であった。52 名 (49.1%) は「入り待ち・出待ち」の参加経験があり、40 名 (37.7%) は「お茶会」への

参加経験があった。「ヅカ友だち」の有無については、いる人が90名(84.9%)、いない人が16名(15.1%)であった。宝塚ファンであることを周囲に公言しているか否かに関しては、公言している人が73名(31.1%)、公言していない人が33名(68.9%)であった。

2. 轟真ジェンヌに対するファン心理尺度の回答分布

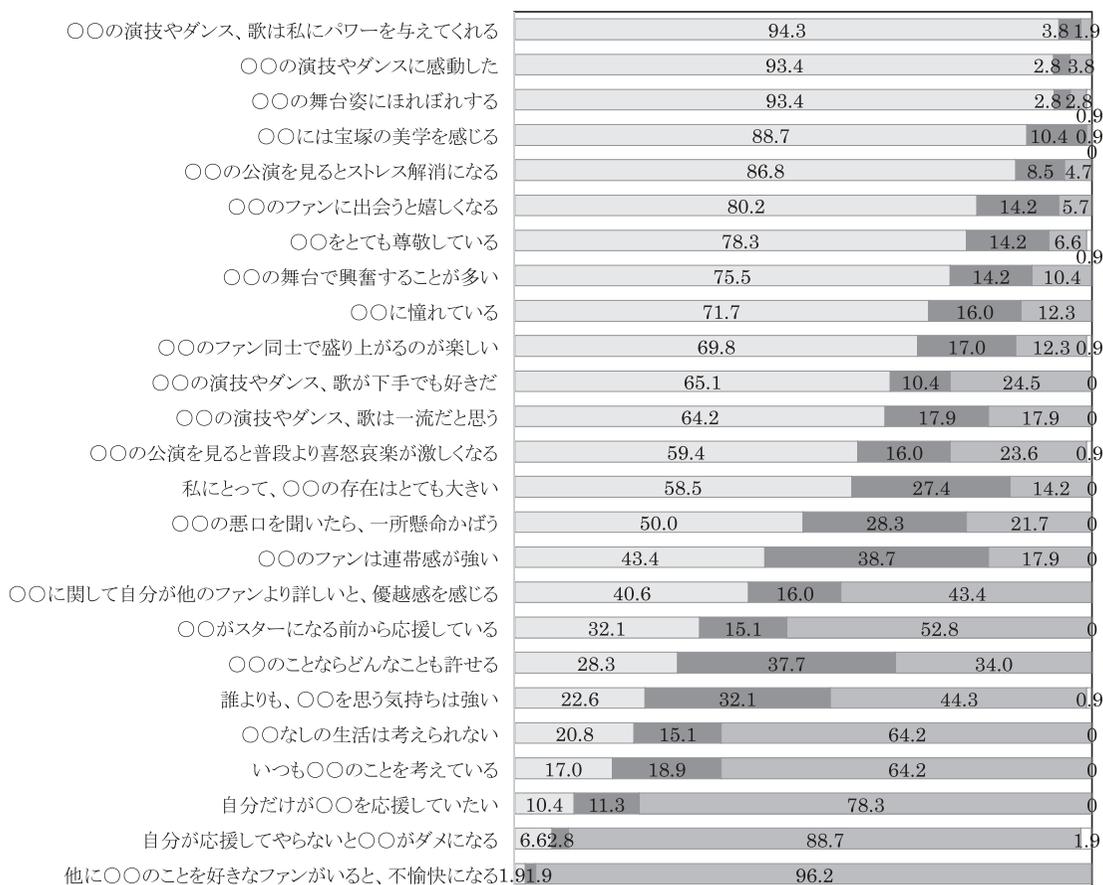
轟真ジェンヌに対するファン心理尺度の25項目についての回答分布は、図1の通りである。「○○の演技やダンス、歌は私にパワーを与えてくれる」「○○の舞台姿にほれほれする」「○○の演技やダンスに感動した」の3項目において、「とてもそう思う」もしくは「どちらかという

そう思う」と回答した割合が90%以上であった。一方、「全くそう思わない」もしくは「どちらかという」と回答した割合が90%以上であったのは、「他に○○のことを好きなファンがいると、不愉快になる」の1項目のみであった。

3. 轟真ジェンヌに対するファン心理尺度の因子分析結果

轟真ジェンヌに対するファン心理尺度25項目のうち、「そう思う」もしくは「そう思わない」の回答が90%以上であった4項目については、天井効果及び床効果がみられたとして以降の分析から除外した。残りの22項目に対して、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行っ

□とてもそう思う/どちらかというと思う ■どちらともいえない ■全くそう思わない/どちらかというと思わない □無回答



図中の数字は%

図1 轟真ジェンヌに対するファン心理尺度の回答分布 (N=106)

表1 轟真ジェンヌに対するファン心理尺度の因子分析（最尤法・プロマックス回転）

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	
“魅了”因子 ($\alpha=0.83$)					
〇〇のファン同士で盛り上がるのが楽しい	.777	.106	.016	-.197	
〇〇のファンに出会うと嬉しくなる	.739	-.053	.039	.010	
〇〇には宝塚の美学を感じる	.674	-.123	-.281	.229	
〇〇の舞台で興奮することが多い	.671	.289	-.079	.008	
〇〇の演技やダンス、歌が下手でも好きだ	.633	-.132	.146	-.166	
〇〇の悪口を聞いたら、一所懸命かばう	.529	.014	.219	-.037	
〇〇のファンは連帯感が強い	.477	.130	.063	.037	
“依存”因子 ($\alpha=0.82$)					
〇〇なしの生活は考えられない	-.040	.944	-.035	.025	
いつも〇〇のことを考えている	-.091	.799	.255	-.040	
私にとって、〇〇の存在はとても大きい	.307	.491	-.185	.114	
“独占”因子 ($\alpha=0.73$)					
誰よりも、〇〇を思う気持ちは強い	.047	.189	.706	.100	
自分が応援してやらないと〇〇がダメになる	-.093	.058	.636	-.063	
〇〇に関して自分が他のファンより詳しいと、優越感を感じる	.341	-.223	.628	.106	
“尊敬”因子 ($\alpha=0.69$)					
〇〇をととても尊敬している	-.054	-.022	.105	.728	
〇〇の演技やダンス、歌は超一流だと思う	-.170	.059	-.102	.666	
〇〇に憧れている	.106	.021	.108	.618	
	負荷量平方和	4.575	3.403	3.036	2.644
因子相関	因子1	.445	.499	.429	
	因子2		.368	.434	
	因子3			.220	

た。因子数は、固有値1以上を基準とし、寄与率・解釈妥当性に基づき総合的に判断した結果、4因子解を最適解として採用した。因子負荷量0.45以上を基準として項目選択を行い、因子に負荷しない6項目を削除した。そして最終的に、16項目について改めて探索的因子分析を行った結果、4因子16項目が抽出された（表1）。

第1因子は、「〇〇のファン同士で盛り上がるのが楽しい」「〇〇のファンに出会うと嬉しくなる」「〇〇には宝塚の美学を感じる」などの7項目であった。この因子は、轟真ジェンヌそのものやファン同士の連帯感に魅了された宝塚ファンならではの心理と捉え、“魅了”因子と命名された。第2因子は、「〇〇なしの生活は考えられない」「いつも〇〇のことを考えている」「私にとって、〇〇の存在はとても大きい」の3項目であった。この因子は、轟真ジェンヌへの依存を表しており、“依存”因子と命名された。第3因子は、「誰よりも、〇〇を思う気持ちは強い」「自分が応援

してやらないと〇〇がダメになる」「〇〇に関して自分が他のファンより詳しいと、優越感を感じる」の3項目であった。この因子は、轟真ジェンヌを独占したい心理を表しており、“独占”因子と命名された。第4因子に負荷量の高い項目は、「〇〇をととても尊敬している」「〇〇の演技やダンス、歌は一流だと思う」「〇〇に憧れている」の3項目であった。この因子は、轟真ジェンヌを一役者、舞台人として尊敬する心理を表しており、“尊敬”因子と命名された。

内的整合性を確認するため α 係数を算出したところ、「魅了」は $\alpha=0.83$ 、「依存」は $\alpha=0.82$ 、「独占」は $\alpha=0.73$ 、「尊敬」は $\alpha=0.69$ であった。この4因子モデルについて確認的因子分析を行ったところ、適合度指標は、GFI=0.83、AGFI=0.76、RMSEA=0.08 であった。

表2 轟肩ジェンヌに対するファン心理に関連する要因

変数	標準偏回帰係数			
	“魅了” 因子	“依存” 因子	“独占” 因子	“尊敬” 因子
性別（女性：1）	.261*	.056	.108	.185
年齢	-.071	-.085	.149	-.019
ファン歴	.006	-.013	-.140	-.092
年間の観劇回数	-.188	.282*	-.398**	-.098
ファンクラブ入会経験（有：1）	.199	.021	.243*	-.096
ヅカ友だちの有無（有：1）	.230*	.155	.246*	.092
宝塚ファンと公言（している：1）	.206	.177	.167	.087
決定係数	.255**	.258**	.242**	.066

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 轟肩ジェンヌに対するファン心理に関連する要因

因子分析結果に基づき、轟肩ジェンヌに対するファン心理尺度の因子毎に項目得点を加算し、算出された合計得点を下位尺度得点とした。轟肩ジェンヌに対するファン心理の関連要因について検討するため、各因子を基準変数とし、「性別」「年齢」「ファン歴」「年間の観劇回数」「ファンクラブ入会経験」「ヅカ友だちの有無」「宝塚ファンの公言」の7項目を説明変数とする重回帰分析を行った（表2）。その結果、決定係数は、「魅了」「依存」「独占」の3因子において有意であった。年間の観劇回数は、「依存」と有意な正の関連性を示し、「独占」と有意な負の関連性を示した。ファンクラブ入会経験の有無は、「独占」と有意な正の関連を示すことが明らかとなった。ヅカ友だちの有無は、「魅了」及び「独占」と有意な正の関連を示すことが明らかとなった。

5. 轟肩ジェンヌの退団経験

轟肩ジェンヌの退団経験の有無については、経験がある人が71名（67.0%）、経験がない人が35名（33.0%）であった。経験がある71名のうち、20名（28.2%）は轟肩ジェンヌのファンクラブに入会していた。退団理由については、「満足」が30名（42.3%）、「普通」が31名（43.7%）、「不満足」が7名（9.9%）であった。

6. 轟肩ジェンヌの退団による喪失悲嘆尺度の回答分布

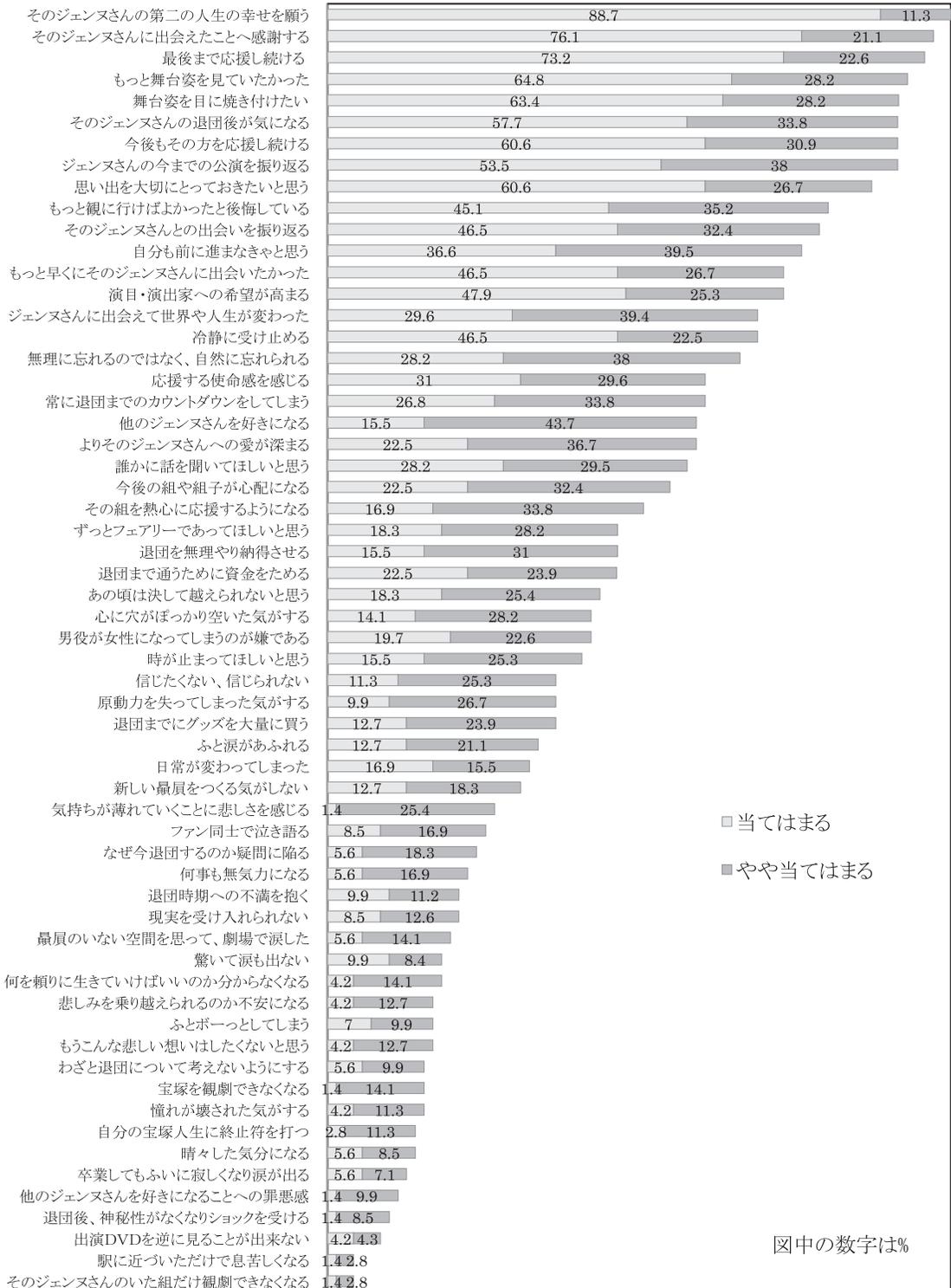
轟肩ジェンヌの退団経験のある71名に尋ねた

喪失悲嘆尺度60項目について、「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した人の割合は図2の通りである。60項目のうち36項目において、回答者の30%以上が、「当てはまる」もしくは「やや当てはまる」と回答した。さらに、そのうち14項目では、該当者が回答者の70%以上であった。特に「そのジェンヌさんの第二の人生の幸せを願う」においては100%であり、次いで「そのジェンヌさんに出会えたことに感謝する」（97.2%）、「最後まで応援し続ける」（95.8%）であった。一方で、該当者が10%以下であった項目は、「そのジェンヌさんのいた組だけ観劇できなくなる」（4.2%）、「駅に近づいただけで息苦しくなる」（4.2%）、「出演DVDを逆に見ることが出来ない」（8.5%）、「退団後、神秘性がなくなりショックを受ける」（9.9%）の4項目であった。

IV. 考察

本研究では、轟肩ジェンヌに対するファン心理の構造や、轟肩ジェンヌの退団に伴う悲嘆に関して、量的調査に基づく探索的な検討を行った。対象者数が少ないため、今回の結果の解釈は慎重に行う必要はある。しかしながら、これまで心理学的研究として取り組まれた同様の研究はほとんどなく、特に退団に伴う悲嘆に着目した研究は今回が初めての試みであり、本研究の独自性は高く、研究意義は大きいといえる。

今回、100名程度の回答者にも関わらず、回答者の中にはファン歴が60年の人や、年間の観劇回数が50回の人もいて、熱狂的なファンの存在



図中の数字は%

図 2 鼠唄ジェンヌの退団による喪失体験に関する回答分布 (N=71)

を垣間見ることができた。今回の回答者は、平均でみると、ファン歴は約15年で、年間の観劇回数は約10回であった。この数値が宝塚ファン全体において、どの水準にあるのかは判断できないが、回答者にはかなり熱心なファンも多く含まれていたと考えられる。

今回作成した鼯貞ジェンヌに対するファン心理に関する質問項目では、8割以上回答者が観劇を通して、感動やパワーを得たり、ストレス解消になったりすると答えており、これらが多くのファンにとって宝塚歌劇の魅力になっていることが示唆された。質問紙末尾での宝塚歌劇の魅力について尋ねた自由記述欄には、「宝塚を好きになって自分も頑張ろうと刺激をうけた」「夢の世界を体験することができてストレス解消になる」「鼯貞ジェンヌの存在で毎日が楽しい」などの回答もみられた。

鼯貞ジェンヌに対するファン心理尺度の項目の中で、約8割の回答者は「〇〇のファンに出会うと嬉しくなる」と回答していた。実際、回答者の約85%は「ヅカ友だち」がいると回答しており、宝塚ファンにとって、ファン同士のつながりは大きな意味があり、宝塚歌劇の魅力になっていると考えられる。今回の調査では、熱心なファンも多く含まれていると想定されるにも関わらず、回答者の約7割は宝塚ファンであることを周囲に公言していないことが明らかとなった。宝塚歌劇の世界は、女性だけの集団であり、私設でファンクラブを作り、入り待ち・出待ちをするなど、特殊な世界である。したがって、世間的には「入り待ちや出待ちのために長時間ジェンヌを待って整列しているファンが少し怖い」「女性で宝塚が好きならば同性愛者なのではないか」などと捉えられることもある。ゆえに、宝塚ファンが周りにいなければ、公言しづらく、過去にファンであったことも言わない人がいると考えられる。このような自らが宝塚ファンであることを公言することへのためらいが、宝塚ファン同士のつながりをより強めているようにも思われる。

今回作成した鼯貞ジェンヌに対するファン心理尺度では、下位尺度として「魅了」「依存」「独占」「尊敬」が抽出された。本尺度の項目は宝塚ファンを対象とした予備調査に基づいており、内

容的妥当性は認められる。確認的因子分析の結果、適合度指標は必ずしも良好とはいえないが、一定の因子的妥当性は有しているといえる。信頼性に関しては、各因子の α 係数が0.69から0.83の範囲であり、内的一貫性は確保されている。このように本尺度は、最低限の妥当性と信頼性を備えた尺度であり、宝塚ファンの鼯貞ジェンヌに対するファン心理を査定する上で有用であると考えられる。

今回、年間の観劇回数が多い人ほど、鼯貞ジェンヌに対する「依存」の程度が高く、「独占」の程度が低かった。ジェンヌへの依存度は実際の観劇行動につながる一方で、ジェンヌへの独占意識は必ずしも観劇行動とは結びついていないことを示唆している。また、ファンクラブの入会経験がある人や、ヅカ友だちがいる人の方が、「独占」の程度が高いことが示された。ファンクラブ活動やヅカ友だちとの交流を通して、鼯貞ジェンヌに対する身内意識が高められた可能性が考えられる。ヅカ友だちがいる人の方が、鼯貞ジェンヌに対する「魅了」の程度が高かったことは、ファン同士のつながりが宝塚歌劇の大きな魅力の一つであることを示唆している。

喪失とは、「人が生活の中で感情的に投資している何かを失うこと」(Harvey, 2000/2002, p.28)と定義されており、精神分析学の領域では、近親者の死など愛着や依存の対象を失う体験は、「対象喪失」(object loss)と呼ばれる(小此木, 1979)。宝塚歌劇においてタカラジェンヌとファンは密接な関係にあり、宝塚ファンにとって愛着対象である鼯貞ジェンヌの退団は非常に大きな喪失体験となりうる。今回の調査では、回答者の67%が鼯貞ジェンヌの退団を経験しており、宝塚ファンにとって決して稀な体験ではないことが示唆される。

喪失に対する様々な心理的・身体的症状を含む反応は、悲嘆と呼ばれる(Stroebe & Stroebe, 1987, p.7)。本研究では、鼯貞ジェンヌの退団に伴う悲嘆として、どのような身体的、心理社会的反応がみられるのかを探索した。今回提示した悲嘆反応を表す60項目に対して、「当てはまる」「やや当てはまる」との回答は100%~6%の範囲でみられ、30%以上が該当するとした項目が36

項目であり、そのうち14項目は該当者が70%以上であった。これらの結果は、轟真ジェンヌの退団に対する悲嘆反応には、個人差が大きいものの、今回提示した悲嘆反応の半数以上は決して特殊な反応ではなく、多くのファンに共通する反応も多くあることを示唆している。

特に該当者が多かった「そのジェンヌさんの第二の人生の幸せを願う」「そのジェンヌに出会えたことに感謝する」という反応は、宝塚ファンに特徴的な悲嘆反応といえる。宝塚ファンは、宝塚歌劇団で公演を行う轟真ジェンヌを応援するだけでなく、宝塚という舞台上で努力し活躍する“その人”を応援している。ゆえに、ファンは退団の事実は悲しくても、“その人”の続いていく人生の幸せを応援せずにはいられないのであろう。

また、回答者の一部ではあるが、「現実を受け入れられない」「何事も無気力になる」「ふと涙があふれる」「心に穴がぽっかり空いた気がする」「何を頼りに生きていけばいいのか分からなくなる」などの回答も示された。これらの項目は、大切な人との死別などの大きな喪失体験においてもみられる悲嘆反応である。このことは、轟真ジェンヌの存在が宝塚ファンにとっていかに大切であり、その喪失の衝撃が人によっては非常に大きなものとなりうることを示唆している。

本研究の限界として、回答者の偏りが挙げられる。機縁法でのデータ収集であったことから、類似した考え方や態度を持ったファンが多く含まれた可能性が考えられる。今後の研究においては、機縁法や特定の私設ファンクラブを通じての調査協力依頼ではなく、多様なファンからの回答を得る工夫を行う必要がある。また本研究では、回答者106名中男性は3名のみであり、性差について十分な検討を行うことができなかった。元来、宝塚ファンは女性に多いと考えられがちであるが、実際には男性ファンも多く存在する。よって今後は、男性ファンにも目を向けた研究も求められる。

今回の調査では、宝塚ファン一人一人に轟真ジェンヌがいるという前提で質問項目が設定された。しかし、宝塚ファンの中には、轟真ジェンヌがいないファンや、複数の轟真ジェンヌがいるファンもいる。このような轟真ジェンヌの存在の有

無や数の観点から、宝塚ファンの心理を多面的に検討していくことも必要であろう。

本研究では、轟真ジェンヌの退団に伴う悲嘆の一端を示すことができたが、データ数が限られていたため、因子や関連要因の検討など踏み込んだ分析や検証は行えなかった。今後の課題として、今回の結果を踏まえて、測定尺度の開発や、それを用いた関連要因の検証など発展的な研究を行っていく必要がある。また、轟真ジェンヌ退団後のファンの心理プロセスに関する精緻な分析も今後の課題である。

V. おわりに

本研究では、轟真ジェンヌに対するファン心理尺度の構造を明らかにするとともに、轟真ジェンヌの退団による悲嘆について探索的に検討した。轟真ジェンヌに対するファン心理として、「魅了」「独占」「依存」「尊敬」の4側面から構成されていることが明らかになった。また、轟真ジェンヌの退団は、ファンにとって大きな喪失体験であり、多様な悲嘆反応が経験されることが示された。

第二著者は、自他共に認める熱的な宝塚ファンであり、本研究は自らの経験をもとに着想、企画されたものである。100周年を超えた今後の宝塚歌劇の繁栄のためにも、新規ファン獲得はもとより、より既存の宝塚ファンのことを考え寄り添った事業展開は欠かせない。ファンが抱く悲しみや不満などにも目を向けた研究を蓄積することで、より宝塚歌劇の発展に寄与できるものと思われる。本研究がその一つのステップになることを願っている。

付記

本稿は、第二著者の卒業研究のデータを再分析し、内容を再構成したものである。

【引用文献】

- 阪急電鉄株式会社 (2015) 『宝塚歌劇のホームページ』
 〈<http://kageki.hankyu.co.jp/index.shtml>〉 (2015年10月30日アクセス)
- 江藤茂博・植木朝子・加藤暁子・清水玲子・日向薫 (2007) 『宝塚歌劇団スタディーズ-舞台を100倍楽

- しむ知的な 15 講座』戎光祥出版
- 桜木星子 (2002) 『宝塚観劇を楽しむ－会ってナンダ？タカラヅカのファンクラブ』〈<http://allabout.co.jp/gm/gc/199404/>〉 (2015 年 10 月 30 日アクセス)
- 空野りか (2013) 『宝塚ファンあるある』アスペクト
- 川上桜子 (2005) 「ファン心理の構造－思春期・青年期の発達課題との関連から」『東京女子大学心理学紀要』1: 43-55
- 中本千明 (2009) 『宝塚読本』文藝春秋
- はるな檸檬 (2011) 『zucca×zuca (1)』講談社
- 広沢俊宗・井上義和・岩井洋 (2006) 「プロ野球ファンに関する研究 (V)－ファン心理、応援行動、および集団所属意識の構造」『関西国際大学地域研究所叢書』3: 29-40
- Harvey, J. H. (2000) 『Give sorrow words: Perspectives on loss and trauma』Philadelphia: Brunner- Routledge (安藤清志 (監訳) (2002) 『悲しみに言葉を：喪失とトラウマの心理学』誠信書房)
- 小此木啓吾 (1979) 『対象喪失』中公新書
- Stroebe, W., & Stroebe M. S. (1987) 『Bereavement and health』Cambridge, England: Cambridge University Press

A Pilot Study of Favoritism and Grief among Takarazuka Revue fans

Yukihiro Sakaguchi*¹ Yasue Goto*²

ABSTRACT

The aim of this study was to investigate the nature of favoritism toward “Takarasiennes” (Takarazuka actresses) and fans’ grief when their favorite member leaves the Takarazuka Revue Company. A total of 106 Takarazuka fans answered questionnaires concerning favoritism toward Takarasiennes (Scale for Favoritism toward Takarasiennes : SFT) and their experiences of grief. The mean length of time subjects had spent as fans was 15.1 years. The mean number of plays watched per year was 10.4. As a result, factor analysis with promax rotation revealed that the SFT had four major factors : “fascination,” “psychological dependence,” “possessiveness,” and “respect.” The number of plays watched per year was shown to be related to the level of “psychological dependence.” Persons who had a number of friends with similar interests showed significantly higher levels of both “fascination” and “possessiveness.” The results showed that 71 (67%) subjects had experienced the departure of their favorite member. More than 30% of these experienced thirty different varieties of grief reaction, and more than 70% experienced fourteen different varieties. Interestingly, all of them indicated “I wish the Takarasienne happiness in her new life.” In conclusion, we clarified four aspects composing the structure of favoritism toward Takarasiennes. The findings also suggested that the departure of a favorite Takarasienne has a heavy impact on individual fans, causing them to experience a wide variety of grief reactions.

Key words : Takarazuka Revue, favoritism, grief

*1 Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

*2 Graduate, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University